

旭川医大病院ニュース

初夢

病院長 久保良彦

年が改まりました。職員の皆様今年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

昨年を振り返ってみますと、国の内・外まことに多事・多難であったと申してよく、まさしく大変な一年でありました。

そのような中で病床稼働率や保険請求額が前年を上廻った、特定機能病院の要件を、ほぼクリアすることができた、など私共の旭川医大病院が一年を大過なく過ごし、着実に実績を重ねることが出来ましたことはご同慶の至りで、皆様と共に喜びたいと存じます。

さて今年ですが、昨年年着工された特殊診療棟の高気圧酸素治療室の新営が四月からの稼働に向けて進んでおります。また、注射薬一本渡しは今年度末までに全病棟で実施が予定されており、加えて平成八年度概

題字は吉岡元病院長
〔編集〕
旭川医科大学医学部附属
病院広報誌編集委員会
委員長 小川教授
(麻酔科 蘇生科)

算要求のうち、特殊診療棟関係の放射線治療装置(術中照射)、手術部の眼科用マイクログラフシステムなどの大型予算が内示され、看護婦定員一名、集中治療部助手一名の増員が認められました。まことにありがた

いことでありました。当節大学附属病院と言えども診療収入を度外視することはできず、と言うより第一に考えなければならぬ上げざるを得ないこと、それにつけても各診療科の活動に欠かせない中央診療部門の整備充実が最優先されなければならない重要課題の一つと考えられます。

このような観点から今年度次のような項目の実現を夢見ました。
一、救急部・集中治療部の一本化による定員の活用
二、ナースステーションにおけるクラークシップの

誌面の都合で言葉が足りず、ご理解をいただくには遠いかと存じますが、いざいにしてしましても皆様のご協力なしには実現の不可能なことばかりであります。病院運営委員会等で折にふれ、ご説明いたしたいと存じております。

今年はこの旭川医大病院の開設二十周年に当たります。節目の年として一層の前進を心から願ひいたしております。



永年勤続者表彰

勤労感謝の日を前にして平成七年度の本学永年勤続者表彰式及び文部省永年勤続者表彰式が、十一月二十一日(火)午後四時三十分から、事務局第一会議室で行われました。表彰式及び伝達式は部局長及び所属長の列席のもとに行われ、学長から被表彰者に対し表彰状並びに記念品の贈呈が行われました。

- 次いで、学長から永年にわたり本学の発展、充実に尽力されたことに対する、感謝とねぎらいの挨拶があり、これに対して被表彰者を代表して衛生学山村晃太郎教授から謝辞が述べられました。
- 表彰式及び伝達式終了後、引き続き事務局第二会議室で祝賀会が行われ、永年にわたる思い出話に和やかな懇談のひとときを過ごしました。
- なお、被表彰者は次のとおりです。(敬称略)
- 本学永年勤続者
- 天内 敏雄 (施設課)
 - 稲場 茂 (動物実験施設)
 - 植西 勇夫 (庶務課)
 - 葛西 眞一 (外科学第二)
 - 鹿島 時子 (医事課)
 - 鹿島 盛雄 (放射性同位元素研究施設)
 - 金子 美彦 (会計課)
 - 金平 登 (動物実験施設)



- 小濱 郁子 (薬剤部)
 - 合田 尚弘 (施設課)
 - 佐々木孝志 (解剖学第一)
 - 笹嶋 唯博 (外科学第一)
 - 佐藤 安一 (図書課)
 - 澤山 陽子 (衛生学)
 - 高木 弘 (動物実験施設)
 - 滝本 達志 (会計課)
 - 竹田 敏明 (施設課)
 - 田中 達也 (脳神経外科)
 - 田中 宏 (動物実験施設)
 - 谷本 光穂 (物理学)
 - 布子 秀世 (施設課)
 - 信岡 学 (検査部)
 - 乗田 典子 (看護部)
 - 濱中 浩正 (動物実験施設)
 - 山村晃太郎 (衛生学)
 - 文部省永年勤続者
 - 稲垣 俊一 (薬剤部)
 - 船木 正宣 (業務部)
- (庶務課職員係)

【薬剤部】

新薬紹介(27)

カルペリチド (遺伝子組換え)

カルペリチドは、大腸菌を用いた遺伝子組換え技術によりサントリが開発したアミノ酸28個からなるα型のヒト心房性Na利尿ペプチド、α-human Atrial Natriuretic Peptide、α-hANPと呼ばれる新しいタイプの急性心不全治療薬であります。

1960年Kangらによりモルトットの心房筋細胞内に特有な顆粒の存在が指摘されて以来、心房を伸展させると利尿現象が生じ、本顆粒が生体の体液量や電解質濃度の調節に関係しているのではないかと推測され、数多くの動物実験の結果その関与にあずかっているのがヒト心房筋から分離・同定・構造決定されたα-hANPであります。これは心臓から分泌され循環血液量や血圧の調整を行うホルモンの一種であることがわかりました。つまりANPは心不全状態による心房型の伸展の刺激により産生され、血管拡張・利尿作用を通して心不全状態を修復しようとする生理活性物質で、重

症になるほど血中濃度は高くなるため、心不全の診断と治療の二つの面で意味を持つ物質といえます。

心不全は心機能の低下により身体に十分な血液が循環されなくなった状態であり、交感神経系、レニン・アンジオテンシン・アルドステロン(RAA)系及びバソプレシンによる末梢血管収縮作用と水・Na貯留作用が増強しており、心臓に対する前負荷・後負荷が増強していることが認められています。

治療では、血管拡張と利尿を図ること、つまり減負荷療法が中心であります。薬物療法としては、ジギタリス等の強心薬、フロセミド等の利尿薬、ドパミンやドブタミンといったカテコールアミン系薬剤、硝酸薬を中心とするいわゆる血管拡張薬等が使用されています。しかし、これらの薬剤はときにより中毒症状や頻脈をはじめとする不整脈の発現、反射性の心拍数増加を伴うなど問題点もみられます。これに対して本剤は、

主な作用として血管拡張作用と利尿作用を併せ持つっており、同時にRAA系を抑制し、心拍数には影響を与えないなど、心不全治療薬としては、都合の良い薬剤と考えられます。しかし、本剤は内因性の

生理活性物質ですから、心不全において内因性のANP濃度が非常に高い値を示している状態で、外因的に本剤を追加しても血行動態がさらに改善するのであるうかという疑問が残ります。実際、こういった症例において本剤を静注したところ血中ANP濃度は数倍に増加し、尿中Na排泄量が増加して腎血管の拡張も認められているとのことであります。

臨床成績は、血行動態改善度が88%、全般改善度は80%と報告されており、副作用は、承認時までの調査症例396例中20例(5.1%)に認められ、主なものとしては血圧低下など、血圧に関連するものが3.5%あり、投与中は血圧を慎重にモニターすることによって、過度の血圧低下に注意する必要があるとあります。

以上、本剤は新しく発見された内因性の活性物質を製剤化したものであり、心不全時の血行動態修復に大きな役割を持つていることなどを特徴とします。そして、興味深いことに、これまでポンプ器官としてのみ考えられていた心臓が、体液量を調節する内分泌臓器としても重要であることが明らかになりました。なお、本剤については「新医薬品承認審査概要(SB

いまま、気になる病気

話題の病気①

腹腔鏡下手術 産婦人科編

腹腔鏡下手術が腹部領域に導入されてすでに久しい。当院でも平成七年より第二外科を中心に内視鏡下胆嚢摘除術が行われてきた。我々、産婦人科も平成七年十月より、卵巣腫瘍や子宮外妊娠を対象に本格的に腹腔鏡下手術を行いつつある。腹腔鏡下手術の開腹に対する利点は、患者への侵襲が少なく、術後の疼痛が著しく軽減される、術後の入院期間を短縮し得ることの二点である。一方、モニターを見ながらの手術となるため、操作の習熟に一定の経験が必要となる点、視野の確保のため全身麻酔を必要とする点、手術時間が一般に開腹より長くなる点

が不利と言える。産婦人科に腹腔鏡が導入された歴史は古く、当院でも昭和五十九年頃より、体外受精、胚移植患者における、腹腔鏡下採卵を行ってきた。また子宮内膜症や不妊症の治療や診断を目的として、症例数は少ないながら継続して行っていた。現在我々が腹腔鏡下手術の対象としているのは、卵巣腫瘍、子宮外妊娠(未破裂例)、子宮内膜症における癒着剥離および仙骨子宮韧带切断である。このうち最も症例数の多い卵巣腫瘍については、平均手術時間は一時間四十五分である(一例子宮附件器摘出術)。これは開腹の一時間十三分に比較し明らかに長い。一方患者の在院期間は平均一・二日であり、開腹に比べ、平均四・七日間の短縮である。術中の合併症としては、腫瘍の術中破綻が、例であり、特に小さな創から腫瘍を腹腔外に摘出する際に破綻し内容が腹腔内に散布される危険があり、悪性が強く疑われる場合には腹腔鏡下手術の適応とはしない方が無難であろう。一方導入当初懸念された、術中の出血などによる開腹手術への移行は一例も無く、この点では安全性が確認されつつあると言えそうである。

子宮外妊娠に関しては、従来疑い例に対する診断目的で行われてきたが、最近では腹腔鏡下に患側卵管を摘出する根治術や、卵管を切開し絨毛成分、胎児などを除去する保存手術、MTXやPGF2α製剤を局注する保存療法が内視鏡下で行われ、良好な治療成績を示している。当院ではまだ三例しか実施していないが、二例が卵管摘除、一例が卵管切開である。最近では単純子宮全摘術やリンパ節郭清を含む広汎子宮全摘術までも腹腔鏡を用いて行っていることが報告されている。しかし単純子宮全摘術は従来から行われていた腔式子宮全摘術の一部操作を腹腔鏡下に行うのみであるし、広汎子宮全摘術に関しては手術時間が七時間以上と報告されており、当院で導入するかどうかについては教室内でも意見が分れている。

腹腔鏡下手術にはさらに、用いられる器具の大半がDisposableのため、器具を正直に使い捨てた場合には、保険点数では経費をカバーしえないという問題がある。そのため腹腔鏡下手術を導入している施設のほとんどすべてが、本来使い捨てである器具を滅菌消毒し再生利用してこの問題を乗り越

藤田 育志

えている。
 腹腔鏡下手術は医療費の自己負担がきわめて大きく、入院期間の短縮が強く望まれた米国などで急速に普及した。完備した保険制度を持ち、患者の自己負担が最終的にはきわめて低額の本

見えない

放射線部

Milipitas, CA 海外研修報告 (一)

平成七年三月、放射線発生装置が更新され、それに伴い米国はカリフォルニア州ミルピタス市にある Varian Education Center にて High Energy C-Series Clinical Operations について

八月十二日から二十四日までの約二週間教育研修を受講してきた。新婚旅行以来二度目の海外ということでも多少興奮ぎみであった。成田空港からサンフランシスコ空港までの一〇時間余りの旅。機内でのビールの酔いも手伝ってか、ウトウトしている、天使のささやきが聞こえ、次にぎわめきと変わり、いつのまにか目的地についていた。時差は十六時間程度で、それほど苦にはならない。憧れのウエストコースト、さすがに空は果てしなく青

邦において、腹腔鏡下手術がさらに普及、発展するかどうかは、これらの手術時間やコストパフォーマンスの問題を乗り切れるかどうかにか、案外掛かっているのかもしれない。
 (講師 川村 光弘)

く深い。気温は二〇度ほどであるが、直射日光は極めて強烈である。
 迎えを待っていると、いきなり身長二m、迫力あるインディオ系の大男が現れ、タバコを要求してくる。軽い気持ちで一本差し出した。二本目もと手を出してくる。下に落ちていく。と言ったら、ギロツとにらみ、怒って去って行ったが、すぐさま他の日本人を物色していた。

待つこと一時間、ようやく黒のリムジンが迎えに来た。料金はそれほどでもないが、チップは高い。車で走ること一時間半。途中の道路は片側四車線。果てしなく直線は続き、さすがにアメリカ大陸。
 目的のミルピタスは大変な田舎でなんの魅力もないが、世界有数のコンピュータ関係の企業が目白押し



参加者全員による記念写真

に並び、最先端技術の開発に余念がなく壮烈である。それとは対象的に宿泊した Beverly Heritage Hotel はアンチックで気品があった。タバコなんか簡単に買えると思っていたが、何処にも自動販売機は無く、三日間の禁煙を余儀なくされた。後日ホテルから自転車を借りて、サンノゼ方面へ二〇km以上離れた所に、古めかしく怪しげなバーをみつけた。勇気をだして入ってみた。よそ者に対する他の客の眼差しは強烈であった。ここでもタバコは無い。やつとのもので刺青をしたマスターと交渉して五本ほどわけてもらった。この時の一服は格別であった。よほど自転車であつた。見

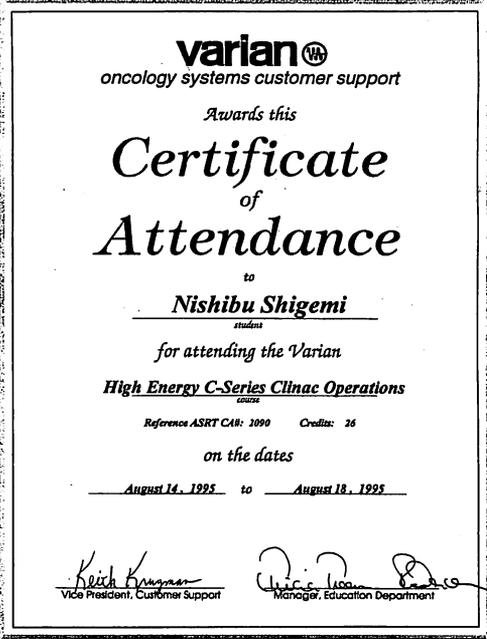
かけとは随分と裏腹に、とても愛想が良かった。帰りの自転車急ぎに重くなり進まなくなった。なんとパンクである。これまた余興である。自分に言い聞かせたが、自転車を押しての二〇kmは酔いも手伝い、辛かった。しかし、次の日もめげずに訪問した。諸手を挙げて飲んでくれた。
 いよいよ、研修当日。この一週間は時間が止まっているかのようにと長く感じられた。コーススケジューリングは九〇分の講義が八単位、同じく実習が六単位からなる。各国から九名が参加し、日本人は私と札幌市立病院の外田氏の二人であつた。ちなみに教官は MARGI 先生と BRIGHTA 先生で、どちらも体格は頗る良好な女性である。自己紹介から始まった。まずこの研修に参加した目的と到達目標がメインであり、あとは如何にユニークに自己アピールできるかが重要となった。私は英語の名刺を持参し、さらに燕調査係長のご好意により、旭川医科大学概要を一部持つていったので、教官はもろろのこと参加者からも随分と好評であった。機会があれば北海道に遊びに来たいと言わしめたわけであつた。



講義の様子、中央は MARGI 先生
 突然、ニュース解説のよるな英語で講義が始まる。一方的に聞いていただけではすまない。日本の大学の講義とは違い、質問の連続である。すぐに回答できない時でも他の人に質問し、必ず後で聞き返される。数カ月間ののぼる線量測定データ取得のためか心身共に疲れていたこともあって、気分転換のつもりでいたが、とんでもないことであつた。
 一日目は真に疲れきつた。英語に集中するということはない、こんなにも大変だとは！長い長い一日であり、ホテルに帰るとビールを飲んで、気が付くと二日目の朝である。

電子加速の原理についての講義である。テキストのいたるところにプランクがあり、その答えをうめていかなければならない。まさに pester nishibu with questions であり、容赦はない。虫歯の治療で麻酔をかけるように一日中研磨されているようなものである。ようやく二日目が終わる。へとへとである。
 三日目の朝がきた。今日は教官の質問に対してグループで相談して答えを出す方式である。このやり方は、小集団に競争心をうえつける。質問内容は英語圏の人達にとつても難解であるが、物理的な面では多少私に有利であり、随分と評価されてきた。授業内容もだいたい理解出来るようになると、結構楽しいものである。この日はそんなに長くは感じなかつた。夕食の後のビールがとつても旨く、他の国の人達との会話も弾むようになってきた。
 四日目にして、研修に参加した後悔の念が自然と消えつつある。午後からはクラス全員と食事をし、私達二人の日本人に気をつかってもらい、刺身の食べられる所に案内してもらった。日本食を口にできて嬉しかったが、ココナツツバターにつけた鮪の味は複雑である。アルコールが入ると会

講習修了証



話も弾み、気楽に全員と話が出来た。新小学校一年生が学校の授業に少しづつ慣れていく様を思い浮かべてみて下さい。あれだけ憂鬱な毎日も時間がたつと、楽しい事柄に変わっていく。最終日になんとかコースの修了証を受け取った時には、ジーンと熱いものがこみ上げてきた。とても嬉しい。アンケート用紙が配布された。感心したことは、生徒を評価するばかりでなく、最後に教官を項目別にチェックすることである。ここが日本との違いであり、講義内容が陳腐化しない理由でもある。このことは、生徒と教官が人間として対等であり、心のありようが大陸的で大きい。不思議なもので、徐々に自分の中の緊張感が薄れる

と、友達も自然にできるものである。日系のアメリカ人と知り合い、金曜日の夕方にパルアルソのショッピングセンター(妻への日頃の感謝をこめてコーチのバックを購入した)やスタンフォード大学を案内してもらった。帰国後学内LANのE-mailを使い、お礼のメッセージを送信した。しばらく返事が来ないので、きちつと送られているかが不安になった。待つこと三週間。返事が来た。仕事でヨーロッパに出張していたとのこと。どんなに遠い国でも光ケーブルの信号を確認し、簡単に文章のやり取りが出来る昨今。彼のPlease keep in touch という心の感触が忘れられない。

続く

(副技師長 西部茂美)

輸血部発 ⑫ 『インドネシアの医療事情』

輸血の話とは直接関係はませんが、外務省が企画した平成七年度海外巡回医師プログラム(九月二十日〜十月十八日)として赤道直下の国インドネシアを訪問する機会がありましたので、当地の医療事情を中心に紹介します。

インドネシアの人口は約二億人、一七〇〇〇以上の島からなる東西約五、一〇〇kmにおよぶ群島国家で、ジャワ島に経済の中心があり、人口の六割がここに集中している。今回の巡回の目的は、インドネシア、特に地方に在住する日本人の健康相談を行うことで、ジャカルタを起点に合計七カ所を訪問した。

首都ジャカルタは人口約九〇〇万人の大都会で、急激な交通量の増加と都市交通整備の遅れからくる交通渋滞など、七%を超える経済成長をうかがわせる様相を呈していた。しかし、全体の経済発展とは異なり、一般的な労働者の月収は五



ボロブドル寺院にて

〇〇〇〜六、〇〇〇円(十萬〜十二万ルピア)で、医療も必然的に、この生活水準に合わせたものが基本となっていた。また一方では、医師に限らず、公務員の多くが時間外の勤務から収入を得ることが多く、医療も、実質的にはこの時間外医療に重点がおかれ(高収入のため)、二重構造になっていくとのことであった。また医療設備の都市―地方格

差も大きく、特に地方に住む在留邦人の現地医療機関に対する信頼度は必ずしも高いとはいえなかった。実際の状況はと言うと、病院見学を行うことができた地方の拠点都市の代表的病院でさえ、CT scan がやっと外国の援助で導入されることになったというところで、検査の質はまだ発展途上の感があった。また、たまたま外国の援助で最新の検査機器が入っても、そのラニングコストに見合った医療費を確保できないため、検査項目を減らしたり、機器を休止せざるを得ない事も見られた。

輸血に関連した検査では、インドネシアはB型肝炎の濃厚汚染地区であるにも関わらず、一部の地区を除いて輸血用血液の検査の実施には疑問があった。HIV 感染についてもインドネシアの登録感染者数は数百人という事だったが、近隣のタイで六〇万人、東南アジア一帯で三〇〇万人という数からすると、実態は未検査である可能性が高い。いざにせよ、現地での輸血による感染防止の保障はななく、輸血を必要とする手術治療に関して言えば、在留邦人の不安も領かざるを得ない感じがあった。

しかし、検査手段の乏しさは逆に経験に基づいた確かな診断を生むようである。現地の医師の感染症に対する診断能力は決して低くはないようであった。抗生物質などは輸入により、自由に利用できるため、感染症に対する診断でも、医療コストのかさむ細菌検査などを行うことはなく、医師は治療的診断学により、逆に臨床診断を確かめている様子も見られた。

今回の外務省巡回医師団

東南アジアIIでは、内科医の山寺医師(第二内科)、小児科医の梶野医師らとともにバンジャラルマシ(ボルネオ島)、スラバヤ(ジャワ島)、ウジュン・パンダン(スラウエシ島)、ソロン(ニューギニア島)、アンボン(アンボン島)、セマラン(ジャワ島)、デンプサール(バリ島)さらにブルネイを加え、合計八カ所を巡回し、約四〇〇名の健康相談を行った。各巡回期間のフライト時間の合計は十六時間におよび、文字どおり、四週間をかけた。インドネシアを飛び回った。現地の衛生状況(飲料水の汚染)、感染症(マラリアなど)に緊張する瞬間もあったが、豊富な果物と、美しい景色に酔いしれることも多く、また一度訪れてみたいと思っている。

(副部長 山本 哲)



バリ島の夜明け

消防訓練実施される

平成七年十月二十四日(火)午後二時から、本学附属病院にて消防訓練が実施されました。訓練は、本学防火管理規程に基づき、病院での火災発生時における人的、物的被害を最小限に止めるために、迅速かつ適切な通報連絡・初期消火及び避難誘導等の連携即応体制の強化を目的として、特に今回は職員が手薄になる勤務時間外(夜間)の火災発生を想定し、夜間勤務者を中心とした職員の協力のもとに実施されました。

今回は、四階西病棟リネン室より火災が発生、火災報知器が鳴動し、防災センター職員が受信機の表示窓で出火場所を確認、他の当直者、夜勤者等と協力し、

消防機関、関係者へ通報連絡、初期消火及び四階西病棟に入院している患者の避難誘導訓練が行われました。特に、今回の訓練においては、旭川市南消防署の協力により梯子車の出動による救助訓練も行われ緊迫感にあふれた訓練となりました。

訓練とはいえ、一秒でも早い消火、避難に努め関係者一同真剣な面持ちで機敏に立回り、一人のケガ人も出さず無事救助出来ました。

しかし、これは予め行動要領により火災を予知していたためで、実際の火災に遭遇した時は、今まで繰り返して行ってきた訓練を確実に落ち着いて実行する事が



肝要であります。

一連の訓練終了後、旭川南消防署の指導のもとに初期消火のための消火器操作訓練を実施し、最後に旭川南消防署次長の講評があり、最近の火災の実例から初期消火の大切さ、繰り返し訓練を行う事の大切さが強調され、久保病院長からは、今後なお一層防火体制を強化するための職員の協力をお願いする旨の挨拶がありました。無事消防訓練を終りました。

(会計課 管財係)



『ニュース・雑感』

年四回発刊される「旭川医大病院ニュース」の編集委員(記者?)の一人に今年度より加えていただいております。今までも「何々ニュース」、とか「何々季刊」とかの編集、作成に多少携った事があり、その都度「読まれるニュース、読まれる記事」とは何か考えていました。ニュース、記事は対象とする読者、また発刊される期間、頁数などの特殊性によりニュースに当然「質、量」の条件、制限があります。その条件、制限内で読まれるニュースを提供しなければなりません。「ニュース」とは広辞苑によれば「珍奇な事。新しい出来事。またその報道」となっています。旭川医大病院ニュースは季刊ですのでその間の珍奇な事、新しい出来事、報道ということになります。ニュースは出来事を正確に客観的に報道する必要があります。一昔前、誰が言ったのかは忘れましたが「新聞のニュース記事で正確で客観的な記事はスポーツの結果の報道記事だけだ。」と言った人がいました。「ニュース」は読者に判断する材料を提供するだけで記者、編集者の意見や一方のみの意見だけ

を載せることは避けなければ成りません。ニュースの是非を判断するのは読者です。編集者(記者?)ではありません。

読まれるニュースには大きな二つの条件があります。一つは対象である旭川医大病院関係者が当然知っておかなければならない事の報道。もう一つは今まで知らなかったけれども知っておかな



ければならない事を見つけたし正確に、客観的に報道する「スクープ記事」であります。読者を「アツ」と言わせる、いわゆる「特ダネ」です。この後者のスクープ記事こそ読まれるニュースの魅力であり、醍醐味であります。そのためにはスクープ記事を見つけ出し取材する記者とその記事の

取捨選択を判断する編集者との呼吸が合致して初めて魅力あるスクープ記事となります。編集委員(記者?)は積極的に取材してスクープ記事を見つけ出す必要があります。このスクープ記事がないと魅力ある、読まれるニュースとは成らず、ただ単に告知版で終わってしまいます。この「スクープ記事」を見つけ出したいものであります。しかしこの「スクープ記事」をあせる余り記者、編集者が常軌を逸し相互信頼関係を失したり、充分吟味されていない記事を報道しては成りません。また編集者(記者?)はスクープ記事として報道した事に責任を持ち長期間経過観察しその経過、結果を再び報道する義務があります。最近、「ニュース」につき感じていることを述べてみました。

(整形外科助教 平山 隆三)



医局対抗野球

本誌の前号(第五十四号)

に「医局間の戦い」という見出しで、医局野球大会の記事が掲載され、楽しく読ませていただきました。少しばかりの驚きと感慨を覚えずにはいられませんでした。驚きのほうは、医局対抗野球大会とは銘打ってはいませんが、開始から今日まで全くの自主開催である本大会が、本誌のような大学の公式の出版物に記事としての初めであることと対してであり、感慨は、十行目からの「この大会は、ほぼ開学と同時に始まり、云々……」が随分前のことを私に想い出させたからです。特にその中で、「発端は明らかではありませんが、……」は、発端に関わった者に、発端を今、明らかにしておきたいという欲望を強く起こさせました。編集委員会の皆様の御許可をいただきまして、その経緯を簡単に述べさせていただきます。

第一回大会は、昭和五十四年に行われました。五十四号でとりあげられたことに偶然ではありますが、因縁めいたものを感じます。昭和五十四年七月九日に八講座の代表が集まりまして、

第一回医局野球大会の開催

が決まりました。同年七月二十六日に参加チームが集まりまして、出場選手資格や、コールドゲームや延長規定、参加費一万円やその他が決められました。第一回大会は参加十チームで開催され、その第一試合は、



耳鼻科・眼科・麻酔科連合チーム(当時は連合チームが活発で、その他泌尿器科・皮膚科連合と脳神経外科・放射線科連合がありました。)と第二内科との間で、八月十一日に行われ、7対6で前者が勝ちました。第一回大会の決勝戦は第一外科と耳鼻麻連合の間で行われ、延長八回、2対1で第一外科が勝ち、栄えある優勝を手に入れました。以後継続

日本手術医学会の出席

去年の十月二十日・二十

一日にかけて吉宗ブームに沸く和歌山県田辺市で第十回日本手術医学会が開催された。二日間にわたり、手術に関する多くの問題が議論されたがその中からいくつかを紹介したい。最も注目を集めたのはシンポジウム「手術部と災害対策―阪神・淡路大震災に何を学ぶか―」で神戸大学等の手

して行われていますので、本年優勝の小児科は、第十回大会優勝となります。数々の名選手が現れ、華麗な技で見るものを魅了し、闘志あふれるプレーは医師であることを疑わせるほどであります。しかし、それ以上に医局野球の楽しさを増すのは、珍プレーであるのは間違いありません。全くの自主大会が、このように長く継続されて行われているのは、類を見ない事実であります。たくさんの野球好きがいて、続けたいという意欲があるからにはかならず、また逆に、野球にはそれだけの引き付ける魅力があるからです。発展を切に願うものです。

(脳神経外科講師 代田 剛)

術部の代表から生々しい報告がなされた。要約すると

①各病院とも災害マニュアルはそれなりに持つていたが災害規模は想定を越えていた。②停電はすぐ(当日の昼または数日後)に復旧したが、給水タンクや給水系路の破損の為に日常診療に必要な水のみならず、手洗い、高圧滅菌、空調、室温管理が不能となり、自家発電も水冷の為に、長時間運転が不能となる等打撃が最も大きく回復の為に二週間を要した。③医療用ガス(液化酸素、液化窒素)系統の破損のため、酸素、圧搾空気の使用が不能となり、復旧に三週間程を要した。この様に災害対策としては、電気、水、医療用ガス、情報網等、総合的な対策が必要であると強調されていた。

今回の手術医学会では例年にもまして感染症対策に関する多くの演題が出された。時を同じくして、日本手術医学会の手術器械滅菌・消毒に関する委員会報告が公表され、現時点に於ける感染症対策に対する一定と方向性が明らかにされたと言える。印象に残った発表を報告したい。一つは本学会を主宰された永井先生

病院関係職員忘年会開催

病院関係職員の懇親と理解を深めることを目的とし

十二月十四日(木)午後五時三十分から病院職員食堂において「病院関係職員忘年会」を開催、医師、看護婦並びに中央診療部門や事務局から二五〇余名の参加がありました。



が会長講演の中で、病院全体で一時期セフエム系第三世代の抗生剤の使用を止めたところ、MRSA感染症が激減した事実を示した事で、感染対策の一つの参考になろう。又、現在手術器具の消毒に最も良く使用されているエチレンオキサイドガスの使用が世界的に規制される方向にあり、それに代わりうるいくつかの新しい滅菌法の開発が急速に進んでいる事である。この中で過酸化水素水を用いたガスプラズマ滅菌法と電解酸性水を用いた滅菌法が注目を集め、多くの施設で検討が行われていた。現状では電解酸性水は滅菌法としては力不足との印象を受けた。



この忘年会は、今回で三回目となりますが、当日は看護部から「カルメン達のフラメンコダンス」、放射線部から「ピートルズのヒットメドレー」、本学女声コーラス部の合唱の余興が披露されるなど、会場は華やいだ雰囲気でも盛り上がっていました。

(庶務課調査係)

中島 進